

Troilus and Criseyde の文体 (1)

佐々木 富美雄

外国語教室

(1974年9月11日受理)

Stylistic Study of *Troilus and Criseyde* (Part I)

Fumio SASAKI

Department of Foreign Languages

(Received September 11, 1974)

My main purpose in this essay is to find out the stylistic elements of the particular word 'honour' in *Troilus and Criseyde*, which is the only full length work that Geoffrey Chaucer (1340?-1400) ever finished. In this long poem 'honour' operates very important role as the elements of his narrative technique. It is through this 'honour' that we may appreciate Chaucer's stylistic skill. I tried to make it clear how it evolves in *Troilus and Criseyde*.

よう。

〔I〕

ハーバート・リードは文体に関し、芸術全般とかね合
わせつつ次のように述べている。

Art is always, whether visual, verbal or aural, such a process of formation, a crystallization of the amorphous nature of our human existence, and that process is the style of art; style is the grace and clarity with which activity is performed.

Herbert Read:

Poetry and Experience⁽¹⁾

この中における「われわれ人間の無定形的存在の結晶化」こそ時代は離れているが Chaucer の文体にもあてはまるものである。また人の世の未だ知らざるものを具体化へ持って来ようとする試みでもあろう。また「キーツの文体の成長」⁽²⁾の中においてもいわれていることだが、何が詩であるかという理念を追い求めて行く時、常に一定の方向があるという。それは明確かつ具体的な傾向へ進んでいることである。これは単なる明確かつ具体化ではなかった。彼の場合には人間の苦悩と悲しみに応答しようとする姿であった。ここにキーツの詩に深味が見られる要素なのであろう。またいま一つの例で見ても

Countrymen, butchers, drovers, hawkers, boys, thieves, idlers, and vagabonds of every low grade, were mingled together in a mass; the whistling of drovers, the barking of dogs, the bellowing and plunging of oxen, the bleating, the grunting and squeaking of pigs, the cries of hawkers, the shouts, oaths, and quarrelling on all sides; the ringing of bells and roar of voices, that issued from every public-house; the crowding, driving, beating, whooping and yelling; the hideous and discordant din that resounded from every corner of the market; and the unwashed, unshaven, squalid, and dirty figures constantly running to and fro, and bursting in and out of the throng; rendered it a stunning and bewildering scene, which quite confounded the senses.

(Oliver Twist: Chapter XXI)⁽³⁾

Charles Dickens はロンドンの街を愛した人であった。当時の場末の状況を良く知っていたのである。ここにはそれが再現されてある。朝の街路が時の進むにつれてその喧噪さが高まるのが感ぜられる。and で結ばれた

句が中心となってその響きは高鳴っている。幼少の頃に劇が好きでその方面に進もうとしたことがある。その特性を生かし晩年には各地で朗読会を開いた。この“public readings”の効果は大きかった。(4) 夜に開かれ、かつその朗読の効果を高めるため定刻の10分前には席に着くよう求めている。*Oliver Twist* も良く朗読の対象となった。彼の場合には思想・感情・表現が一体となった時に素晴らしい文体が生れている。ここにあるばかりでなく“cheer and prosper”, “peace and retirement”, “fair and innocent”, “dark and gloomy”, “wept and prayed”, “wild and rigid”, “nursing and caring” など一連の句が作用している。文芸作品の中であって言語は色々の角度より相乗的に影響し合い、効果をもたらす。しかしキーツもこのデイクケンズも声を出して読むという伝統の中にあつた。これは注意されねばならぬ事である。

もともと中世以前の文芸は朗読され極く少数の聞き手(Audience)によって楽しまれたものである。言葉の響きの面白さと同時に物語の内容や展開の仕方にも規律があつた。*Oliver Twist* の場合には社会的要求と勧善懲悪とが大きなテーマとなつて人々に響いた。小さくは彼の常套句の中にもつながりが見られる。cheer と prosper とには当然のことながら期待と楽しさが入る。peace と retirement にはそれぞれ落ちつきと安堵感があり、fair と innocent には純粹さや無垢な状態が入る。これらはすべて文体に表出され、大きくは物語全体の連続性を与える。(5)

〔Ⅱ〕

Geoffrey Chaucer の *Troilus and Criseyde* は 1372年から1386年にわたって書かれたもので、中世の枠組の規律を心得て作られたものである。彼はその典拠をフランスに直接求めたのではなくイタリアの Boccaccio に求めた。当時の ‘audience’ は未だ “matters” や “stories” を伝統の中に示してくれる事が文学であると思つていた。(6) その時代的背景においては Geoffrey Chaucer 一人がいるのではなく John Gower (1330?—1408) が彼の友人として存在し、また William Langland (1330?—1400?) が対蹠的に、かつ Chaucer 自身は *The Romance of the Rose* の訳者として存在していたのである。(7) この *The Romance of the Rose* の訳者であるということは何を当時あつては意味したのか。それは ‘courtly love’ と allegory の世界を知っていることを意味し、同時にフランスのこうした流れを集大成する立場にいたことを示すのである。そして社会的には極めて複雑な社会に居て、Chaucer は自分自身が良くそれを知つていた。C. S. Lewis の言葉

を借りるならば事物の判断の際、その二面性を良く見抜く事が出来た程の人達が文学を楽しんだという事だ。(8)

この地上の榮譽榮華の果無い事 (mutability) を知つており、‘courtly love’ は遊び的性格 (truancy) を持つて発展して来たのだ。*Troilus and Criseyde* の中には理念と情念の対立が見られるが、この遊びの面から考えると当時あつてはもっとも合理的な情念の処理方法として見ることも出来るわけである。この ‘courtly love’ には結婚そのものは関係しない。(9) 人々はこの ‘courtly love’ に事寄せて人々は楽しみ、満足したのである。この ‘courtly love’ 自体は果無いものであるが、この中で一つだけ確かなものとして考えられていたものがある——それは ‘chastity’ (貞節) である。Robert Henryson (1430?—1506) の “*The Testament of Cresseida*” や Shakespeare の “*Troilus and Cressida*” のトロイラスやクレセイデを比較する時、彼は漫然と中世の流れの中にイタリアの作品やフランスの流れを借用したのではない事が知れる。Chaucer はイタリアの作品を借用する時、ルネッサンスの呼吸をしている人々を己れの中世化の方向へ統一した。(10) 単なる中世化だけではなく男女の心理的曲折を仔細に語つたのである。

Troilus and Criseyde は次のスタンザから始まる:

The double sorwe of Troilus to tellen,
That was the kyng Priamus sone of Troye,
In lovyng, how his aventures fellen
Fro wo to wele, and after out of joie,
My purpos is, er that I parte fro ye.
Thes'phone, thow help me for t'end'te
Thise woful vers, that wepen as I write.

(1:1-7)

二つの悲しみ、つまり wo(woe) から wele(prosperity), wele から wo えと一つの人間の常なる運命の流れに抗し得ぬ悲しみの愛の詩である。寺院を見廻りしているこの詩の主人公 Troilus が未亡人である Criseyde に思いをかける事から始まり、その仲を Criseyde の叔父にあたる Pandarus がとりもつてこの恋は成就する。ギリシヤ軍に逃亡した予言者 Calcas の娘の交換の嘆願から運命は逆転する。Antenor と交換されギリシヤ軍側に行った Criseyde は二度とトロイには帰って来ず、‘chastity’ を破るのである。何故であろうか。Criseyde は最初は平和的雰囲気の中に美しい人として描かれてある。とりわけ真面目な社会層に属し未亡人でありながら、身分、地位、財産もあり、上品に生活出来る人として登場する。何故に ‘False Criseyde’ の汚名をつけられねばならぬのか。二つの悲しみという悲

劇的要素のもとではその劇的効果が示されているという解釈もある。最初から Criseyde は悲劇的なのだという時もある。(11) Criseyde が背反することによって Troilus の悲しみは一層明確になるのだという事も出来よう。(12) しかし Chaucer はこの二人を大きな運命の枠の中で行動させた。人間の信念の弱さを描くのである。人間的には兄の Hector が典型的な理想像として描かれるが、彼とても運命の輪の中にしかない。彼の死後、Troilus は何に頼るのであろうか。神々にも見放された彼はやはり大いなる神——創造主の世界に帰することが最上の道であった。Criseyde は自分一人で生きる世界が如何に淋しく、かつ弱いものであるかを知っていた。それが恐怖心となって最後までつきまとう。トロイ側にあっては Troilus が出現する。その仲介は世話好きの Pandarus がおり、すべてが保護されている。ギリシヤ軍側に行った彼女は何に頼ればよいのであろうか。ここにギリシヤ軍の Diomedes が出現する。彼は Troilus よりはすべての点において経験者として出る。恋の手管も心得ていた。C. S. Lewis はこれを次のように評している：

And so, weeping and half-unwilling, and self-excusing, and repentant by anticipation before her guilt is consummated, the unhappy creature becomes the mistress of her Greek lover, grasping at the last chance of self-respect with the words
To Diomedes algate I wol be trewe (13)

「常に」忠実であることを Diomedes に誓う。これが悲劇を生むのだ。彼女の 'chastity' は何処に行ったのであろうか。これを守ることが 'honour' であったのである。この 'honour' の喪失こそが 'chastity' の喪失であり悲劇でもあるのだ。

〔Ⅲ〕

この悲劇的結末に到るまで8239行の中において象徴的に 'honour' は変化する。その変化の姿を具体的に物語の進展に従って見て行きたい。

- 1) "And al th'onour that men may don you have,
As ferforth as youre fadre dwelled here,
Ye shul have, and youre body shal men save,
As fer as I may oughf enquire or here."
(1: 120-123) (14)

父 Calcas の背反の事実が日増しに Criseyde の不安をかきたてるのにいたたまれず、Hector に身の安全を願

うての返事である。この 'honour' は sophisticated された意味は持っていない。父親の "hire fadres shame, his falsnesse and tresoun" (I: 107) を思い合せること明らかである。

- 2) And in hire hous she abood with swich meyne
As til hire honour nede was to holde;
And while she was dwellynge in that cite,
Kepte hir estat, and both of yonge and olde
Ful wel biloved, and wel men of hir tolde.
(1: 127-131)

彼女の地位、身分、財産が保証されている。'honour' はそれを示している。彼女の "In widewes habit large of samyt broun" を守るための漫然としたもので、彼女の純粋な人柄と共に安堵感を生じせしむる語である。次に彼女の全体像の描写がある：

- 3) She nas nat with the leste of hire stature,
But alle hire lymes wel answeyng
Weren to wommanhod, that creature
Was nevere lasse mannyssh in semyng.
And ek the pure wise of hire mevyng
Shewed wel that men myght in hire gesse
Honour, estat, and wommanly noblesse.
(1: 281-287)

この最後の行こそは彼女の象徴であり、またすべての女性の夢でもある。Troilus は寺院で喪服の Criseyde を見た時、Cupid の矢に射抜かれ悶悶とするが、あのでこのてを使った Pandarus によって遂に恋する相手の名前を打明けさせられる。早速に Pandarus は画策し、Troilus は意中を Criseyde に伝えて貰うが、Troilus の姿は次のようになっている：

- 4) The wise, worthi Ector the secoude,
In whom that alle vertu list haboude,
As alle trouth and alle gentillesse,
Wisdom, honour, fredom, and worthinesse."
(11: 158-161)

ここでは Troilus は兄 Hector の次だといって、wise と worthi の形容詞を附している。Hector は Troilus, いな Chaucer によって Knyght の典型として見なされている。Troilus はその次だという。後で Hector が死んでからの Troilus の変化は人間的指針の喪失に比較出来、意味深いものがある。ここでは Troilus は従って「真実味があり、優雅さがあり、智恵もあり、名譽

もあり、寛大さと高邁さ」とを有するすべての理想的徳(virtue)の持主であるとされている。⁽¹⁵⁾ これは Prologue の Knyght と比較するとよくわかる：

he (Knyght) loved chivalrie,
Trowth and honour, fredom and curteisie,
(General Prologue: 45-46)

つまり Knyght の属性が描写され、行動がそれらの形容によってしばられることも意味している。⁽¹⁶⁾ これらの属性をはずれて行動する時 Knyght として資格を失うことになるのだ。Troilus は“Ful worthi was he”(Prologue: L.47)としてこの物語でも行動することを要求されている。騎士として己れの言動に忠実であることが美点として描かれる。これが故に Criseyde の交換の時に行動出来ず、悲劇へとつながるのである。⁽¹⁷⁾

さて Criseyde と Pandarus の会話は主として“*honour and renoun*”がこの物語の進展具合に合わせてテーマとなっている。

- 5) As I to yow have told wel here-byforn,
And love as wel youre honour and renoun
As creature in al this world yborn,
By alle the othes that I have yow sworn,
(11: 296-299)

Pandarus は Criseyde の説得に懸命である。

- 6) I am thyn em; the shame were to me,
As wel as the, if that I sholde assente,
Thorough myn abet, that he thyn honour
shente.
(11: 355-357)

「名声」として‘*honour*’がここでは大きなテーマなのだ。やがて実利的計算が入って来る。

- 7) “Of harmes two, the lesse is for to chese;
Yet have I levere maken hym good chere
In honour, than myn emes lyf to lese.
(11: 470-472)

Troilus の Criseyde に対する恋は彼女から見ると“*heelee*”(=health, soundness の意)であることが述べられるようになる。しかし彼女にとっては恋は“*game*”であるのだ。

- 8) She thoughte wel that Troilus persone
She knew by syghte, and ek his
gentillesse,
And thus she seyde, “Al were it nat to
doone,

To graunte hym love, for his
worthynesse,
It were honour, with pley and with
gladnesse,
In honestee with swich a lord to deele,
For myn estat, and also for his heele.
(11: 701-707)

Criseyde は Troilus を‘lover’として受け入れる時には名声と実利を追求するだけとなる。

- 9) And though that I myn herte sette at
reste
Upon this knyght, that is the worthieste,
And kepe alwey myn honour and my name,
By alle right, it may do me no shame.”
(11: 760-763)

‘worthieste’なるが故に彼女の‘*honour*’と‘*name*’を守らねばならぬとは悲しい話である。そしてこの shame は最後までつきまとう。彼女は“A kynges sone although ye be”(III:170)とか“Ny nyl forbere, if that ye don amys”(III:173)とかいゝ、相手を徹底的に牽制している。次に引用するものは Pandarus が Troilus に話したものだが“*heelee*”が“*plesauce*”(=pleasure)に変わっている：

- 10) “Than, em,” quod she, “doth herof as
yow list.
But er he com, I will up first arise,
And, for the love of God, syn al my trist
Is on yow two, and ye ben bothe wise,
So werketh now in so discret a wise
That I honour may have, and he
plesauce;
For I am here al in youre governaunce.”
(11: 939-945)

そして10)例においては‘*trist*’(=trust)が出て来た。しかし Criseyde の chastity が疑われたとき, “in thought ne dede untrewre/To Troilus was nevere yet Criseyde”(III: 1053-1054)というが、この中の‘*untrewre*’という語を思い返えす時、彼女の性格が如実に浮び出て来る。この物語の最後を見なければこの「真実」が如何に変るかは知るよしもないのである。信頼という基盤の上に彼と彼女の人間関係が成立し、Pandarus に対して彼等が持っている関係も信頼である。その関係に忠実であることが‘*honour*’なのだ。彼女は最後には‘*honour*’にあたいしなかった。しかし曲折をへた後に結ばれた二人の姿においてはすくなくとも‘*honour*’は寛容性と度量をとめない、やゝ哲学的傾向をおびて来る：

11) That swich a vois was of hym and a
stevene
Thoroughout the world, of honour and
largesse,
That it up rong unto the yate of hevене.
That in his herte he demed, as I gesse,
That ther nys love in this world at ese
So wel as he; and thus gan love hym
plese.

(111 : 1723-1729)

そして Troilus は急激に変化する。恋をしている事に對しては “O veray foolles, nyce and blynde be ye!” (I: 202) といった彼はここでは愛の賛美者となる:

12) And moost of love and vertu was his
speche,
And in despit hadde alle wrecchednesse;
And douteles, no nede was hym biseche
To honouren hem that hadde worhtynesse,
And esen hem that weren in destresse.
And glad was he if any wyght wel ferde,
That love was, whan he it wiste or
herde.

(111 : 1786-1792)

しかも王族の血統でありながら “Hym liste of pride at no wight for to chace” (III—1801) であり何人に対しても *benigne* (*benign*) となる。しかも愛の成就是 ‘*pride*’, ‘*avarice*’, ‘*envy*’, ‘*anger*’ その他すべての悪徳(*vice*) (III : 1806) を消滅する。確かに愛は Book I の終りでも彼を変えた。彼は愛を知ってから獅子の如く振舞い, “Wo was that Grek that with hym mette a-day!” (I-1075) であり, 城に帰えって

the fredlieste wight,
The gentlieste, and ek the mooste fre,
The thriftiest and oon the beste knyght,
(1-1079-1081)

となりえた。しかし次の二行を読むとき人は Troilus の ‘*worthiness*’ にかげりを見るのである:

And Troilus in lust and in quiete
Is with Criseyde, his owen herte swete.
(111 : 1819-1820)

さて二人の真価は Calcas のギリシヤ軍に嘆願することによって実現した Antenor との交換によって判断出来る。常に Troilus の ‘*worthiest*’ (II : 761) なる属性により行動させられる事が示されていたのであることを思うと, この交換はまさしく運命のなせるわざである。

13) And if they wolde graunte, as God for-
bede,
Th’eschaunge of hire, than thoughte he
thynges tweye,
First, how to save hire honour, and
what weye
He myghte best th’eschaunge of hire
with-stonde;
Ful faste he caste how al this myghte
stonde.

(IV : 157-161)

ここに到って “how to save hire *honour*” は複雑さを増して来る。彼女を保持することが主目的となって来ては如何ともなしがたい, ‘*what wey*’ と手段をつけ加えざるを得ない。

14) O Troilus, what may men now the calle
But wrecche of wrecches, out of honour
falle
Into miserie, in which I wol bewaille
Criseyde, allas! til that the breth me
faille?

(IV : 270-273)

‘*honour*’ は ‘*miserie*’ と連結されてしまう。Troilus は Criseyde にとって本当の ‘*honour*’ とは何かを知っていたのだろうか。

15) And me were levere ded than hire
diffame,
As nolde God but if I sholde have
Hire honour levere than my lif to save!
(IV : 565-567)

結ばれたのもつかの間, Troilus は情念と理念との葛藤を持たざるを得ない:

16) “Thus am I lost, for aught that I kan see.
For certeyn is, syn that I am hire knyght,
I moste hire honour levere han than me
I every cas, as lovere ought of right.
Thus am I with desir and reson twight:
(IV : 568-572)

Troilus の ‘*hire knyght*’ だという理由だけでは Criseyde の行動を止め得ない。交換が決まり Troilus は手をつくして懇願するが, Criseyde の心は決まっていたのである。

17) “Certes, if ye be unkynde,
And but ye come at day set into Troye,
Ne shal I nevere have hele, honour, ne
joye.

(IV : 1440-1442)

- 18) "And vulgarly to speken of substaunce
Of tresour, may we bothe with us lede
Inough to lyve in honour and plesaunce,
Til into tyme that we shal ben dede;
(IV : 1513-1516)

といい、彼女が戻って来なければすべてが虚であり、一緒に逃げることを提案するが断られる：

- 19) Be fals to yow, my Troilus, my knyght,
Saturnes doughter, Juno, thorough hire
myght,
As wood as Athamante do me dwelle
Eternalich in Stix, the put to helle!
(IV : 1537-1540)

この "Be fals to yow" は Troilus に響いた。彼女はこれに加えてこれでもかと言わんばかりに若し自分の行動が知られたなら "my lif lay in balaunce" (IV : 1560) といい、それに "And youre honour" (IV : 1561) と加えて彼に決断をせまる。既に Troilus の行動範囲は中世の Knyght の規範をのりこえている。トロイ軍もギリシヤ軍もなくなっている。人柄の変容が知れるときこの 'honour' はまさしく 'aristocrat' としての誇りのみが行動となって行くのである。Criseyde の言動もまた大きな運命の輪によってゆらぎ始めたのである。

- 20) "And also thynketh on myn honeste,
That floureth yet, how foule I sholde it
shende,
And with what filthe it spotted sholde
be,
If in this forme I sholde with yow wende.
Ne though I lyved unto the werldes ende,
My name sholde I nevere ayeynward
wynne.
Thus were I lost, and that were routhe
and synne.
(IV : 1576-1582)

Criseyde は自分の名声はいま分別のない行動をすれば再び手に入れることは出来ぬといってギリシヤ軍に行こうとするが、つまりはギリシヤ軍に行った Criseyde は再び Troilus の所にも戻らぬこととなるのだ。帰えらぬ人を待つ Troilus に Pandarus は言う：

- 21) "Now ris, my deere brother Troilus,
For certes, it non honour is to the
To wepe, and in thi bedde to jouken thus.
(V : 407-409)

この 'honour' はうつろなものとなっている。最後にすべての希望を失ってしまった Pandarus は Troilus に

次のように語る：

- 22) But at the laste thus he spak, and seyde:
"My brother deer, I may do the namore.
What sholde I seyen? I hate, ywys,
Cryseyde;
And, God woot, I wol hate hire evermore!
And that thow me bisoughtest don of
yoore,
Havyng unto myn honour ne my reste
Right no reward, I dide al that the leste.
(V : 1730-1736)

この 'honour' とは如何なるものか。愛の女神に奉仕する事だったのであろうか。Troilus が "Where is youre love? where is youre trouthe?" と叫んだ時に Knyght としての彼の 'honour' は見られない。Knyght は己れの誓いに忠実でなければならなかった。'worthieste' であった彼は極めて行動に忠実であったし、Criseyde も忠実であろうとしたのかも知れぬ。しかし交換後の Criseyde は何を頼りに生きることが出来るのか。その不安の時に Diomedes が彼女の保護者として、すべての事を知りつくした姿で登場するのである。C.S.Lewis の言う如くそうせざるを得なかった状況が生れるのである。Criseyde は心を Diomedes に許すのである。愛の成就是すべての悪徳を消し去ったが、ここに到り地上の罪状を消滅すべく第八天へと Troilus は昇り行くこととなる。⁽¹⁸⁾

- Swich fyn hath, lo, this Troilus for love!
Swich fyn hath al his grete worthynesse!
Swich fyn hath his estat real above,
Swich fyn his lust, swich fyn hath his
noblesse!
Swych fyn hath fals worldes brotelnesse!
And thus bigan his lovyng of Criseyde,
As I have told, and in this wise he deyde.
(V : 1828-1834)

[IV]

The Canterbury Tales の *The Miller's Tale* においては二人の学僧 "hende Nicholas" と "sely Absolon" が "honeycomb, sweet Alisoun" を恋する話であるが、この中において二つの hende と sely が文体上極めて重要な役割をはたしている。唯れが hende であり、唯れが sely であるか——これが重要なのだ。*Troilus and Criseyde* の 8239 行中には 'honour' の変化が重要な文体上の形成要素となる。この語を通してこの詩の一側面の微妙な心理的变化を知ることが出来るのだ。Pandarus は Troilus のために専心努めるが終局には運命に抗し得なかった。Criseyde は 'honour'

をひたすら身の安全と考へ行動するが、その引換えに“False Criseyde”の汚名をきることとなる。これらを心理的变化を悲劇的構成の中に‘honour’通し成長・変化としてとらえ得る時 Chaucer の文体上の巧みさを知るのである。

—NOTE—

- 1) Herbert Read: *Poety and Experience* The style of Criticism p.47 Vision 1967.
- 2) Walter Jackson Bate: *The Stylistic Development of Keats* New York Humanities Press 1962.
1. The Apprenticeship: “The peculiar excellence of Keats—that quality with which he is most closely identified and which sets him apart from the majority of English poets—is the consummate stylistic manifestation, at once intense and restrained, of a passionate desire for absorption in what for him was poetical. His conception of what was poetical underwent progressive change, but it was almost always directed to the specific and the concrete.”
- 3) Charles Dickens: *Oliver Twist* p.153 The New Oxford Illustrated Dickens 1959.
- 4) Martin Fido: *An Authentic Account of His Life and Time* Hamlyn House p.106, Walter Dexter: *The Life Story of Charles Dickens 1812-1870* 1937 (The Dickens Fellowship) p.66.
- 5) Cf. 拙論; *Troilus and Criseyde* における And の効用「片平」10 Pp.83-95.
- 6) C.S.Lewis: *What Chaucer did to II Filostrato* Essays and Studies by Members of the English Association XVII 1932 Pp.56-75.
- 7) C.S.Lewis: *The Allegory of Love* Oxford 1967 p.161.
- 8) C.S.Lewis: Op. cit., p.72.
- 9) J.S.P.Tatlock: *The People in Chaucer's Troilus* PMLA LVI 1941 Pp.85-104.
- 10) C.S.Lewis: Op. cit., p.173ff.
- 11) Arthur Mizener: *Character and Action in the Case of Criseyde* CHAUCER Modern Essays in Criticism Ed. by Edward Wagenknecht p.348ff.
- 12) Arthur Mizener: Op. cit., p.363.
“Chaucer’s arrangement of the narrative is governed by his wish to emphasize the sorrow of Troilus.”
- 13) C.S.Lewis: Op. cit., p.189.
- 14) 使用 Text は F.N.Robinson: *The Works of Geoffrey Chaucer* Oxford 1957 Second Edition
R.K.Root: *The Book of Troilus and Criseyde* Princeton 1954.
- 15) Adrienne Lockhart: *Semantic, Moral, and Aesthetic Degeneration in Troilus and Criseyde* Pp.100-118.
The Chaucer Review Pennsylvania State University Press Vol.8, No.2.
“honour, worthinesse, gentillesse, manhood and trouth” がどのように *Troilus and Criseyde* の中で働いているかをつたえている。
- 16) Geoffrey Chaucer: *General Prologue The Canterbury Tales* Ed. by Phyllis Hodgson The Athlone Press p.75.
- 17) “Worthy can connote social standing, praiseworthiness, bravery, goodness and efficiency, all applicable in his case. This dignified man of experience had loved and faithfully followed the ideals of knighthood from his youth. His personal loyalty, fidelity to his word, magnanimity, generosity, consideration for others are unasailable.”
- 18) Franz Cumont: *Astrology and Religion Among the Greeks and Romans* (1912; rpt., New York, 1960) p.96.